

川端康成と沈從文における伝統への回帰 ——「古都」と「辺城」の比較を中心として

呉悦

1. はじめに

「古都」(1960-1961)は川端康成の代表作で、京都という日本の古い都市を舞台に双生児の千重子と苗子の異なる運命を描いている。一方、沈從文の「辺城」(1934-1935)は都市の文明社会と遮断されている辺境の小さい山間の町を舞台にし、翠翠という主人公をめぐる兄弟二人との悲恋物語を描写している。川端康成の「古都」と沈從文の「辺城」では少女の恋愛物語を通して、それぞれの国の中で異なる文化が衝突し合う現実に対し、作家達の理想的世界、あるいは日本と中国のそれぞれの伝統的社会のあり方を読者の目の前に再現している。ここでの伝統とは作者の想像上にそれぞれの民族が古くから受け継がれてきた人々の気風や風俗、また次世帯に継承すべきものを指す。しかし、こうした作者らにとって賞賛すべき伝統は近代化によって次第に希薄になり、伝えることが困難になりつつあった。作者はそれを嘆息しながら、心の中での伝統のあり方を辿ろうとしている。

日中両国で、さまざまな角度から川端康成と沈從文をそれぞれ研究してきたが、両作家を比較文学的見地から研究するものはまだ少ないようである。日本では、川端康成研究会の第二回日中共同シンポジウムで中国人研究者、文潔若氏が「川端康成の「水月」と沈從文の「阿金」と題する論文を発表した。その論文は「水月」と「阿金」の創作背景、内容といった面から比較し、作品の相違点を分析している。中国では、史永霞氏は「沈從文と川端康成における文化審美観の比較研究」(「当代外国文学」2005年第一期)と題する論文で、両作家はその激動時代にどのように文学独立性を維持するのか、そして、民族文化の独特な道をどのように切り開くのかなどを分析し、民族的及び文化的な角度から両作家を比較している。姜山秀氏は「共同的選択：意象叙情——川端康成と沈從文小説における抒情方式及び伝統からの借鑑」(濮陽職業技術学院学報

2005年第一期) という論文で、両作家の代表作「雪国」と「辺城」の分析を通じて、両作家はそれぞれの伝統文学の抒情方式を継承したという結論を出している。作品の題材や言語風格、創作意図といった方面から研究した論文も見られる。しかし、両作家はなぜ伝統的創作の道を選んだのか、作者の意識がどのように作品において表現されているのかなどの問題は明らかにされていないようである。本論では以上の数少ない先行研究を踏まえて、伝統への回帰というキーワードに着目し、川端康成と沈從文がなぜ伝統をテーマとした小説の創作に至ったのかなどの問題を探ってみたい。

2. 「古都」と「辺城」——消失した故郷

「古都」は戦後の60年代に創作された。当時の日本は敗戦国として、アメリカ当局の支配下で、急激な改革を行い、高度経済成長期に入った。経済発展と共に、西欧文化が次第に日本社会の隅々にまで浸透して、個人主義や功利主義といった西欧の価値観が氾濫し、日本の伝統的観念と固有の文化が未曾有の変化を遂げた。この現実に対し、川端康成は日本のふるさとである京都を憧憬し、古くから残された伝統的行事、風物、美しい景色などを書きとめ、激しい近代化から齎された社会変化を嘆いていた。初期の川端康成は西欧の影響を受け、新感覚派の中心的存在として文壇で活躍したが、中期以降の川端康成は日本伝統を賛美するようになった。「古都」は川端康成がアメリカ文化と日本文化の衝突の結果から導き出した、心のオアシスである京都を描いた小説である。彼は、自らの創作意図を語った時、次のように述べていた。

「「古都」とは、もちろん、京都です。ここしばらく私は日本の「ふるさと」をたづねるやうな小説を書いてみたいと思っています。」¹

これは「古都」連載に入る直前に書かれた短い文章の冒頭である。この「ふるさと」とは言うまでもなく京都を指しており、心の故郷の跡を辿ることこそが真の目的であると述べている。

これに対し、小説「辺城」の舞台となる茶峒は沈從文の故郷をモデルにし、都市の文明生活から離れていた苗族、土家族、漢民族が混在する辺境の小さい町である。青年期の沈從文は五四運動の影響を受け、知識を求め、理想を実現させようとする為に、故郷を離れて上京することにした。しかし、都会人の蔑視を受け、孤独で、貧乏な毎日を過ごし、心の奥底に生まれた無力感に襲われ

る。彼は自らを「田舎者」として自嘲し、当時、文化衝突の最前線の大都市に対する嫌悪感、無力感を抱いていた。30年代の中国は外国列強の半植民地となって、暗黒な政治、不安定な社会の中で、伝統的道德観念などが次第に失われ、民衆は長年自国の腐敗政治と外国との戦争の隙間で生き抜き、その結果、実利を追求し、辺境の農村まで強いられた近代化に影響され、人間性が墮落していた。こうした社会現実に対し、沈從文は以下のように嘆いていた。

最も明らかなことは、つまり農村社会が保有してきた正直で素朴な人情美がほとんど失われており、それに替って登場してきたのがここ二十年現実社会が育て上げた、ある種の実利一点張りの庸俗な人生観である。²

このような社会に直面し、沈從文は川端康成と同じく、現実を嘆息しながら、記憶の故郷に精神の慰めを見出し、過去の美しい伝統的故郷を見つけようとする。「古都」と「辺城」には作家のこうした思想が投影されている。異なる文化や思想意識が次第に古い、辺鄙な所にまで浸透するに従って、本来の社会組織や人々の純朴な考えなどが現実の前に瓦解してゆく。こうした当時の激動的現実の中で、作者らは心の中の平静、理想的な故郷を「古」と「辺」という閉ざされた理想的な空間において愛惜を込めて再構築した。このことによって、変化していた社会の中での不変な民俗、作者らの過去に対する愛や精神の逃げ場を徹底的に浮き彫りにしている。

3. 「静態」と「動態」——伝統的風俗画

心の故郷として、「古都」と「辺城」はそれぞれの国の伝統的風景や祭りを作者らの独自の目線で絵巻を広げるように描くことによって、作者らの故郷に対する無限の愛惜が表現されている。以下では自然環境に対する描写と伝統的祭りに対する描写に分けて、「静態」と「動態」という捉え方によって、作者らの心の故郷の有様を探ってみたい。

3.1 静態

「古都」は京都の四季の移り変わりを風俗画のように描いている。日本の四季を色取る花、即ち西洋文化と異なる日本文化の特性、季節感を表わす伝統的な花により全文が貫かれている。作品が「春の花」の章から始まり、「冬の花」の章で終わり、事件も季節の移り変わりに従って展開してゆく。

その紅しだれは、もっともみごとであった。名木としても知られている。枝はしだれ柳のように垂れて、そしてひろがっている。その下に行くと、あるなしのそよ風に、花は千重子の足元や肩にも散った³

以上は第一章の春の紅しだれに対する描写である。その他に、作者は夏、秋、冬の風景を代表する杉や寒椿などの花を次々に登場させ、古都の四季の特質を色彩豊富に、また繊細な筆遣いで描いている。以下は名産の北山杉の山の描写である。

北山丸太にする杉の植林が層雲のやうに青い梢を重ねたのと、赤松の幹を繊細に明るく列ねた山全体が音楽のやうに木々の歌声を送って来る。⁴

川端康成が認識している日本の自然は色彩は豊富多様で繊細微妙な自然風景である。彼はこうした日本の自然を自らの作品に取り入れ、日本伝統的風景を帯びた小説を創作した。

「辺城」では季節感のはっきりしないが、茶峒という純朴な町の景色を彩り豊かに美しく描いている。例を挙げつつ、辺城の世界に入ってみることにしたい。

谷川は、けわしい山の間をめぐって流れ、三里ほどして茶峒の大河に注ぎ込む。人がもしも谷川を渡り小さい山を越えて、ものの一里も行けば茶峒の町に着く。谷川の流れが弓の背だとすれば、山路は弓の弦にあたる。だが、路の遠近にわずかながら相違がある。谷川の川幅はほぼ二百尺、河床は大きな一枚岩からなっている。静かな河の水は棹が底にとどかないような深いところでも、すっきりと澄みちぎっていて、河の中に泳いでいる魚の数さえ読み取れるほどである。⁵

これは「辺城」の冒頭の文である。わずか四つのセンテンスで、茶峒という静かで辺鄙な町の地理環境を再現している。大都市と異なる村の野性的な魅力を完全に現しているのである。繁華な大都市に聳え立つ硬い鉄筋コンクリートに反して、柔らかく、そして、緑に富んだ詩的な田園景色に陶醉させる魅力を持っている。この飾り気のない素朴な村でどのような人物が登場するのか、そして、どのような物語が展開していくのか、読者は冒頭の素朴な景色描写に想像力を膨らませる。

3.2 動態

「古都」の中では、京都の年中行事や時代祭り、葵祭り、祇園祭りなどの伝統的祭りが生き生きと描かれている。京都の一年は祭りに色取られ、祭りで幕を閉じる。

葵祭りの勅使の列に、斎王の列がくわえられるようになったのは、昭和三十一年からである。斎院にこもる前に、加茂川で身をきよめる、古式をいかしたものであるが、輿に乗った、小桂すがたの命婦を先に、女孺、童女らをしたがえ、伶人に楽を奏させ、斎王は十二ひとえの姿で、牛車に乗って渡る。⁶

これは五月十五日の葵祭りである。六月に入ると、鞍馬寺の竹伐り会が行われる。そして、夏祭として有名な祇園祭は七月一杯続く。

生き稚児の乗る、長刀鉾は、毎年、巡行の先頭であるが、(中略)そして、十一日には、稚児が祇園社にまてる。長刀鉾に乗る稚児である。馬にまたがり、立鳥帽子、水干の姿で、供をしたがへ、五位の位を授かりにゆくのである。⁷

それに八月の大文字、十月の時代祭り、師走の行事などが詳細に描かれている。全文を通してこうした伝統的祭りの描写が目立っている。こうした日本の伝統的祭りを背景にし、作品を描いたのは日本王朝文学の発想であり、近代作家には珍しい。

「辺城」では同じように、苗族の男女の愛を歌壇などの風習と伝説をもとに夢想的に描き出している。例えば、同時に一人の娘翠翠を愛してしまった兄弟二人が、苗族の習慣に従って溪流の対岸から歌を歌い、返事を受け取った者が翠翠と結婚しようというような苗族の伝統的求婚場面を描いている。その他に、端午節の「竜船競漕」、「家鴨を捕まえる競争」などの活気に溢れる伝統的祭りも生き生きと描かれている。

漕ぎ手はおのおの一本の短い櫂を持ち、太鼓の音の緩促に従い調子を揃えて漕いで、船を前に進める。指揮はへさきに坐って、頭に赤い布の包頭をしめ、手に二本の小さな指揮旗を持ってこれを左右にうち振り、船の進退

を指揮する。鼓手と鑼手とはたいてい船の中央に坐って、船が動き出すとたちまちドンドンジャンジャンときわめて単純にたたきはじめる。⁸

このように、川端康成と沈従文はそれぞれの国の希薄になった伝統を見、それが失われていくのを知りながら、作品として再現することによって、伝統的な祭りを生き生きと表現しようとしているのである。

4. 「純潔」と「天真」——無垢な人物

川端康成と沈従文はそれぞれ土地の伝統的風物を描写するのみならず、登場人物にそれぞれ国の伝統的美徳や純潔な性格をも賦与している。人物の性格と土地の風景を融合させることによって、理想的故郷の様子が浮かんでくる。作品中、人物の描写を風景描写に溶け込ませ風俗画の一部として再現している。即ち、人物の無垢さと景色の清純さを融合させ、作者らの美的世界を作り出しているのである。「古都」では、千重子が拾われた状況について次のように描かれている。

「夜桜の祇園さんや」と、母はよどみなく、「前にも話したかもしれんけどな、花の下の腰掛にな、それは可愛らしい赤んぼが寝さしたって、うちらを見て、花のように笑ふのや。」⁹

この文から、千重子の「誕生」を日本を代表する桜という花と結びつけるのが作者の意図と言える。こうした千重子を桜に例える描写は数多くあり、それらは千重子の様子を桜の描写と結合させて千重子の美しさを描き出すのみならず、桜が千重子の運命の象徴ではないかとさえ思えてくる。桜は美しいが、一週間ほどで散ってしまうことが、捨て子としての千重子の運命と似てはいないだろうか。裕福な家で生まれた千重子は、表面から見ればお嬢さんであるが、実は両親に捨てられた捨て子である。真一に恋心を告白された時にも、彼女は捨て子としての運命を嘆いた。小説は彼女の表面の美しさが賛美される一方、その美しさの背後に潜む悲哀が醸し出されている。

一方、「辺城」では、老船頭は「山には竹が多く、こんもりと翠をたたえていた」ことに因んで、孫娘を翠翠と名づけた。

山には竹が多く、こんもりと翠をたたえていたので、老渡しもりはこの身

近な字をそのまま取り上げて、この可憐な孤児に「翠翠」という名をつけてやった。翠翠は風と日光の中で育ったので、皮膚は真っ黒くなった。目に触れるものとしては青いやまと緑の水であったので、瞳は水晶のように明るく澄んでいた。自然が彼女を養い彼女を教育したので、無邪気で元気がよく、いろんな点で小さな獣のようである。⁹

この文から翠翠の純潔なイメージが漂ってくる。翠翠は両親を亡くした後、祖父と暮らし、祖父の保護下ですくすくと成長していく。「小さな獣」の喩えから分かるように、翠翠は人間の悪い根性から離れ自然の恵みのおかげで純潔な娘に育った。翠翠のように暗黒な人間社会から抜け出し、純粹で「小さな獣」のように成長し暮らすことこそ、作者の理想的少女ではないか。

翠翠は純朴で、夢見がちで感傷的だが、肉体的には成熟した娘になっている。だが、彼女は儼送への恋心を心の中に秘めることにした。小説中、こうした感情は直接表現されず、少女特有の恥じらいと風俗の描写を融合させた形により描き出されている。例えば、恋心を打ち明けるために、溪流の対岸で歌を歌っていた儼送の歌に、翠翠は

「あたし昨日ちゃあんと夢の中でとてもいい歌声をきいたの。それがとても軟らかくて身にしみるようで、あたしは何だかこの声についていろんな所へ飛んでいくようなの。虎耳草をたくさん摘んだわ・・・あたしとてもよく寝たわ、とてもおもしろい夢だったわ」¹¹

と祖父に言った。翠翠の恋心は好きな人に直接伝えることなく、夢の中で歌に誘われ魂が散歩することで表現される。ここで始めて、翠翠の恋心が表現されている。

一方、「古都」の中で母親のしげに千重子の恋心を問われた時、千重子の頭の中には次のようなイメージが浮かんでくる。

千重子はうつ向いた。水木真一のおもかげが、浮んできた。幼い真一であった。眉を描き、口紅をつけ、化粧して、王朝風の装束をつけ、祇園祭の長刀鉾に乗った、真一の稚児姿であった。—— もちろん、その時、千重子も幼かった。¹²

母親の質問には好き嫌いとはっきり言わず、幼い時の記憶に残された真一に対する印象が自然に浮かんでくることから、千重子の思春期の特有な恥ずかしさ

が窺えるであろう。

川端康成と沈従文は主人公の少女達を当時の主流社会とはかけ離れた純朴な世界の中に置き、少女達に恋に対する恥じらいを持たせるという工夫から、作者らの審美観を表明していると言えよう。千重子と翠翠は自然の恵みの中で成長し、近代化の波にあまり影響されていないという意味で自然の生命である。分に安んずるこうした自然の生命に根ざしている人物の純粋、純朴な性格を描き出すことによってこそ、作者らの理想的世界を再現することができるのであろう。こうした醸し出された純朴、清らかな世界の中で少女達にはどのような運命が待っているのかなどの疑問については次章で検討する。

5. 「哀傷」と「美」——感傷的ムード

「古都」と「辺城」では、ヒロインの少女は単純、純粋に表現され、恋に落ちる少女特有の恥じらいに溢れている。主人公の描写のみならず、他の登場人物も純朴で、古い土地で、代々伝わってきた家業を守りながら生活している。ところで、彼らにはどんな運命が待っているのでしょうか。

「古都」の中で、千重子の家は次第に没落し、伝統の手織物の将来は楽観できない。図案を描くにせよ、手で織るにせよ、将来に不安を抱く人が増えてくる。千重子の父親の大吉郎は西洋の言葉のついたものは大嫌い、日本には王朝の昔から伝わる優雅な色が好きだと言う。また次に引用するのは大吉郎の友人である宗助の話である。

あすこは、西洋建の四階で、近代工業ですわ。西陣もああなっていくんでつしやろ。一日に帯が五百本もでて、近いうちに、従業員が経営に参加して、その年齢が平均すると、二十代なんやさうでんな。うちみたいな手機の家内仕事は、二十年、三十年のうちには滅びてしまふのとちがひまつしやろか。¹³

彼は近代工業の影響で、大量生産になれば、手織物などの伝統的手工業は、二三十年のうちに滅びてしまうと考えている。他に、京都の伝統行事、自然風物も、多く失われてきている。千重子の家の没落は、日本の伝統が次第に無くなっていく縮図ではないか。

それに、千重子と双生児の苗子は姉妹でありながら、一緒に生活できず、「古

都」の最後にはこう描かれている。

千重子は起き上がって、「苗子さん、雨具おへんやろ。待って。」と（中略）

「これは、あたしがあげるの。また、来とくれやすな。」

苗子は首を振った。千重子は、べんがら格子戸につかまって、長いこと見送った。苗子はふりかへらなかった。千重子の前髪に、こまかい雪が、少し落ちて、すぐに消えた。町はさすがに、まだ、寝しづまっていた。¹⁴

千重子と苗子は元々双子なのに、異なる運命によって、異なった生活を送っている。妹と一緒に成れない千重子はこれからどのように暮らすのか、そして、妹の苗子の将来はどういうふうになるのか、などの疑問を残したまま、作者は小説を終えている。

一方、「辺城」の中で、両親に死なれた孫娘翠翠の幸せを願う気持ち、翠翠を必死に守ろうとする努力と、幸せへの道を切り開いて行こうとする努力は、老人の不慮の死によって徐々に失われていく。自分の気持ちを翠翠に理解されず、土地を離れ川を下る雑送に、翠翠は「あの人は永遠に帰ってこないかもしれない、だか「明日」にも帰ってくるかもしれない」¹⁵という気持ちを持ちながら彼の帰りを待つことにしたという結末となる。

作者らは主人公の少女達に純潔な性格を賦与しつつ、最後は運命に対する無力感を感じさせることによって、現実の前に伝統的な美しいものが次第に失われていくことを嘆いていると言える。しかし、この現実に対する嘆息以外に、作者らの如何なる感情が見出されるであろうか。

「古都」の中で、千重子の双生児の姉妹、幼い時から京都の田舎で育てられ農業を営む苗子は「私は原生林の方が好きです。この世に、人間といふものがなかったら、京都の町なんかもあらへんし、自然の林か、雑草の原どしたやろ。このへんかて、鹿やいのししなんかの、領分やつたんとちがひますか。人間て、なんでこの世に出来ましたんやろ。おそろしおすな、人間て・・・」と言った。「千重子は驚いて、厭世かと問うた。苗子は人間は大好きだし、毎日楽しく働いているし、厭世など大嫌いだけれども、この地上に人間がいなかったら、どうなっているだろうと、ふっとおもうことがある」という。¹⁶

この千重子と苗子の対話を通して、近代化の波で次第に家業が没落していく

千重子と、田舎に生活している苗子を「人間て、なんでこの世に出来ましたんやろ。おそろしおすな、人間て・・・」と対比させ嘆かせていることから、作家自身の思いが窺えよう。千重子と苗子は双生児でありながら、異なる家庭で異なる運命を辿っている。人間に対する失望と人間に対する愛は一見して矛盾した感情であるが、これは一体作者の如何なる心境を表わすのであろうか。川端康成は伝統風景や自然の生命が徐々に失っていくことを目の当たりにし、厭世のかわりに、「人間が大好き」という姿勢で模索することが彼の創作意図と言えよう。伝統が次第に失われていくことを嘆きながら、人間のあるはずの純粹、清らかさといった人間性は大切にされるべきだというのが川端康成の考えではないか。現代に対する嘆き、過去に対する懐かしさと人間に対する愛などの複雑な感情が混じり合って作者の複雑な心情が自然に生まれてきたのであろう。

「辺城」では直接このような気持ちは描かれていないが、作家が必死に昔の田舎の人の純朴さ、勇敢さ、素直さを描き出すことによって、当時社会で次第に失われてきたものが際立っているように見える。しかし、「辺城」連載の終了わずか二日後に発表された「「辺城」題記」で、作者は以下のように書いている。

更に別の一作品の中に二十年来の内戦を取り扱い、まっさきにその被害を受けた農民が、その性格と靈魂とを大きな力におしひしがれて、これまでもっていた質朴、勤儉、温和、正直の型を失い、その後どのような新しいものに変貌せしめられたか。(中略)私の読者は理性を有していなければならぬ。そしてその理性はとりもなおさず中国現社会の変動に対して関心をいだき、この民族の過去において偉大であった点と現下において墮落している点とを認識し、各各それぞれに寂寞を忍んで民族復興の大業に従事している人々にもとづくものである。(中略)また同時に、彼らに一種の勇氣と信念とを与えることになるかもしれないと思うのである。¹⁷

引用の「別の一作品」は「辺城」の姉妹小説と言われる「長河」を指す。作者は農民がそれまでの「純朴、勤儉、穏和、正直」という昔の農民の性格を失ってしまったことを意識しながら、「勇氣と信念」を読者に与えることを控えめに主張する。「純朴、勤儉、穏和、正直」といった人間の理想的資質が民族復興の根幹になるのではなかろうか。しかし、「辺城」のこのような資質を備える人は運命に左右され、悲惨な人生を送るのである。作者は30年代の近代化が次第に辺鄙な農村までに浸透してきたことを目の当たりにし、直接それを批判せず、

過去の思い出の中での故郷の様子を描き出した。これは都市への、即ち近代への逆行を意味するのではないかと思われる。しかし、作者はこういう失望を感じながら、この小説を通して「勇気と信念」を読者に訴えようとしている。これが彼の創作意図と言える。沈從文は「習作選集 代序」で、以下のように述べた。

この世界で砂上や水上に偉い樓閣を作る人がいるかもしれないが、けっして私ではない。私はギリシャ風の小さい祠だけを作りたい。山地を基礎にし固い石で積み重ねる。精緻、丈夫、均等、小さくても繊細ではない建物は理想的である。その中に祭っているのは人間性である。⁸

この段落から分かるように、沈從文の創作目的は人間性を表現し、人間の純潔と純真を賞賛し、それに対し、人間性の醜悪を唾棄することにある。「都市文明」に汚染された人間性を歪な社会から解放することは作者の追求し続けた理想ではないかと思われる。

川端康成と沈從文は近代化の時代の波から、それぞれの国の伝統的なものを守ろうとしている。作中で、伝統的な町で暮らし純潔、素直、恥じらいといった伝統的な性格を備えている主人公が、逆行できない時代の風潮に巻き込まれた時、自らの運命が左右されることになる。こうした失われてきた伝統に対し、作者は主人公に同情しつつ、迷い悩み嘆息している。

6. 「伝承」と「嘆息」——近代化と伝統の葛藤

戦後、世の中の価値観の変動を目の当たりにした川端康成は戦後の世相、風俗、現実を信じない結果、伝統的な日本を描くことに情熱を傾けた。「古都」は日本伝統への回帰という思想が現れた小説である。作者は精緻な筆遣いで日本の伝統的故郷に対する愛を徹底的に描き出している。懸命に理想的世界を作り、純粋な人物を登場させているにも関わらず、人物は悲哀に富んだ人生を辿ることから、川端康成の現実社会に対する失望、不信感が窺えると言えよう。小説の筋は複雑ではないが、登場人物の心理描写や環境描写に工夫がなされている。こうした描写から自然に生まれてきた哀愁が醸し出されている。作中で「運命」という言葉が何度か出てくるが、これは変えられない運命に左右される時の作者の感嘆であると言えよう。その後、川端康成は奇異で幻想的な世界に入り、

「片腕」などの奇怪な小説を描き出し、現実的社会とかけ離れた道を辿ることになる。西欧思想を多く取り入れた新感覚派の旗手から、日本伝統への回帰を経て、不思議な作品を創出し、最後は自殺してしまった川端康成は欧米に学んだ後、日本の伝統に回帰したのだが、これは欧米から押し寄せた近代化と日本の伝統が川端康成の心の中で葛藤を生み、日本の伝統を必死に守ろうにも守りきれなかったという現実に対する無力感の現れではなかろうか。

沈従文も激動の近代中国で生まれ、文学活動に従事したのは1920年代半ばから1940年代後半までである。20年代に理想を追求するため、故郷の湘西を離れ上京してから、近代化された大都市に生活している人々の虚偽、歪な価値観に失望し、昔の故郷の湘西の風景を描くことにした。「辺城」はこうした時代の作品である。40年代になってから、政治的圧迫によって創作活動は中止を余儀なくされた。沈従文が故郷の湘西を描いている「辺城」は彼の代表作として賞賛され、近代化に触れていない昔の農村の素朴な人々は読者を魅了してやまない。

川端康成と沈従文はそれぞれ激動の時代に生まれ、最初は西欧に学んだが、成熟期以降になってから、過去の伝統的なものを描くようになった。近代化に対する嫌悪感を持ち、それに逆行することができないと知りながら、直接それを批判せず、過去の伝統的風景や純朴な人間への愛惜を描いている。作中で人物の心理描写や環境描写などを通じて、簡単な筋から作者の哀愁が自然に出てくる。伝統的事物や人物の性格を称揚し継承しながら、近代化の影響を受けた去勢された人間や失われていく風景に嘆息しつつある。

7. おわりに

以上、川端康成と沈従文における伝統への回帰は、彼らの代表作「古都」と「辺城」を通して明らかになった。作者らは現実社会とかけ離れた理想的社会を作り、閉ざされた空間で純粋な人物を登場させ、人物の無垢な性格を伝統的な自然風景に溶け込ませることによって、伝統社会の独特なイメージを創り出している。しかし、作者らは人物に円満な運命を賦与せず、彼らを運命の前に無力感を感じた人物にしたのは近代化に対する失望ではないか。近代化は利益を齎すと同時に、伝統的なものも奪っていく。両作家は理想の世界を作った上でそれを壊すという点で同様である。この背後に作者の現実に対する失望と未来に対する希望も見られる。両作家は当時近代化に齎された個人主義や享楽主

義とといったいびつな人生観を嘆息しながら、伝統の魅力や人間性の輝きをも賛美してやまない。

注

- 1 『川端康成全集』 第十二巻所収 昭和 45 年 5 月 新潮社
- 2 『沈從文全集』 第十巻 長河題記 小島久代訳 「沈從文一人と作品」 汲古書院 1997 年 中国語原文：最明显的事，即农村社会所保有的那点正直朴素的人情美，几乎快要消失无余，代替而来的却是近二十年实际社会培养成功的一种唯实唯利的庸俗人生观。
- 3 『川端康成全集』 第十二巻 21 ページ 新潮社 昭和 45 年 5 月
- 4 前掲書（注 3） 107 ページ
- 5 『沈從文全集』 第八巻 61 ページ 松枝茂夫訳 「現代中国文学」 昭和 45 年 8 月 河出書房新社中国語原文：小溪流下去，绕山流，约三里便汇入茶峒大河。人若过溪越小山走去，则只一里路就到了茶峒城边。溪流如弓背，山路如弓弦，故远近有了小小差异。小溪宽约丈，河床为大片石头做成，静静的河水即或深到一篙不能落底，却依然清澈透明，河中游鱼来去皆可以计数。
- 6 前掲書（注 3） 69 ページ
- 7 前掲書（注 3） 91 ページ
- 8 『沈從文全集』 第八巻 74 ページ 松枝茂夫訳（前掲書 注 5） 中国語原文：浆手每人持一只短浆，随了鼓声缓促为节拍，把船向前划去。带头的坐在船头上，头上缠裹着红布包头，手上拿两枝小令旗，左右挥动，指挥船只的进退。擂鼓打锣的，多坐在船只的中部，船一划动便即刻蓬蓬铛铛把锣鼓很单纯的敲打起来。
- 9 前掲書（注 3） 44 ページ
- 10 『沈從文全集』 第八巻 64 ページ 松枝茂夫訳（前掲書 注 5） 中国語原文：为了住处两山多篁竹，翠色逼人而来，老船夫给这个可怜的孤雏拾取了一个近身的名字，叫做“翠翠”。翠翠在风日里长养着，把皮肤晒得黑黑的，一对眸子清明如水晶。自然既长养着且教育她，为人天真活泼，处处俨然如一只小兽物。
- 11 『沈從文全集』 第八巻 122 ページ 松枝茂夫訳 中国語原文：「・・・我昨天就在梦里听到一种顶好听的歌声，又软又缠绵，我想跟了这声音各处飞，飞到对岸悬崖半腰，摘了一大把虎耳草…我睡得真好，真有趣。」
- 12 前掲書（注 3） 68 ページ
- 13 前掲書（注 3） 50 ページ
- 14 前掲書（注 3） 196 ページ
- 15 『沈從文全集八巻』 152 ページ 訳松枝茂夫訳（前掲書 注 5） 中国語原文：这个人也许永远不回来了，也许明天回来。
- 16 前掲書（注 3） 107 ページ
- 17 『沈從文全集』 辺城題記 松枝茂夫訳 （前掲書 注 5） 中国語原文：「将在另外一个作品里，来提二十年来的内战，使一些首当其冲的农民，性格灵魂被大力所压，失去了原来的朴质，勤俭，和平，正直的典范之后，成了一个什么样子的新

东西……我的读者应是有理性的，而这点理性便基于对中国现社会变动有所关心，认识这个民族的过去伟大处与目前堕落处，各在那里很寂寞的从事于民族复兴大业的人……同时说不定，这作品也许尚能给他们一种勇气同信心！」

- 18 『沈從文全集』 邊城題記 筆者訳 中国語原文：这世界上或有想在沙基或水面上建造崇楼杰阁的人，那可不是我。我只想造希腊小庙。选山地作基础用坚硬石头堆砌它。精致，结实，匀称，形体虽小而不纤巧，是我理想的建筑。这神庙供奉的是“人性”